
ハヤテのごとく！

花鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハヤテのごとく！

【Nコード】

N4907L

【作者名】

花鳥

【あらすじ】

借金執事のハヤテにおとずれる幸せとは…

第1話

「僕の名前は、綾崎ハヤテ。一億五千万ほどの借金を抱えてしまった僕だが、あるお方に助けて貰いました。そのあるお方とは三千院家のナギお嬢様だったのです！」

「長〜い！」

「だって、これから見る読者たちが困ると思ひまして…それよりお嬢様！ 一人で起きたんですね」

ピキッ

「（何かが切れる音が…まさか！？）」

ハヤテの予感は的中した

「私を子供扱いするな！！！！！！」

「えっ まだ子供じゃないですか」

ますます余計なことを言うハヤテ

「お前って言う奴は…」

「お、お嬢様？」

「屋敷からでていけ！！ 当分帰ってくるな！」

ついにキレたナギだった

「そんなあゝ」

お前が悪いぞ

「うるさい！」

かくして、また屋敷から出て行くことになったハヤテだが、これからどうなるのか？

第2話（前書き）

短いです…

なかなか長く書けない

第2話

「はぁ〜 これからどうしよう…」

屋敷から追い出されたハヤテ、もちろん財布など持ってきていない。

「はぁ〜」

本日2回目のため息がでた

「あれ？ ハヤテくん？」

「（この声は…）」

「こんなところで何してるの？」

「ヒナギクさん！」

思わず叫んでしまった。もちろん周りにいた人たちは、振り向いただろう

「と、ところで、ハヤテくんは何してるの？」

「そ、それは…」

ハヤテは話した今までのくだらないやりとりをすべて

「と、いうわけなんです…」

「……」

返す言葉が見つからず、沈黙が流れた

「なんだかかわいそうね」

「いつもの事ですから」

「そ、そうなんだ」

ますます、かわいそうにおもえてきたヒナギクであった

「で、これからどうするの？」

「そうですねー 適当に公園で野宿ですかねー」

「そんな事ダメよ！ 私の家になさい！」

第3話（前書き）

長めに書いたつもりです

第3話

「僕は、何しているんだ?!」

人のお風呂に入りながらで意味のわからない事を言っていたハヤテ

「どう? ハヤテくん サイズ合うかな?」

そう結局のところ、ヒナギクの家に泊めてもらうことになったのだ

「はい」

「じゃあ、お姉ちゃんが使ってた部屋があるからそこでいい?」

「はい 泊めてもらってますから、どこでもいいです」

「じゃあ 私の部屋で寝る?」

「えっ／＼／＼ その／＼」

顔を赤らめるハヤテ

「冗談よ」

「そ、そうですか…」

少し残念そうな感じなハヤテと…

「（一緒に部屋でもよかったんだけどなあ…）」

ヒナギクであった

「酒ビンばかりですね」

「ごめんね　すぐ片づけるから」

（1分後）

「終わったよ　ハヤテくん」

「いつもながら　早いですね」

ヒナギクは完璧人間であり、こんなことは、朝飯前なのだ

「じゃあ、私はご飯でも作ってくるから、ゆっくりしててね」

「さて、どうしたものか　やっぱり手伝った方がいいのかな？」

悩んでいたハヤテに

「キャア！！」

「ヒナギクさん！！」

ヒナギクの声を聞いたハヤテは、すぐにかけた

「ど、どうしたんですか？」

「ゴ…」

「ゴ？」

「ゴキブリ！！」

ゴキブリと叫んだ瞬間ハヤテに抱きついた

「ちよっ ヒ、ヒナギクさん／＼」

「早くゴキブリを！！」

それどころではないヒナギク

「わかりました。すぐに片づけます」

くしばらくしてく

「大丈夫ですか？」

「ええ おかげで ありがとう」

素直に礼を言うヒナギクだが

「そろそろ 離れてもらえませんか？／＼」

「あっ／＼」

今頃気づいたようだ

「ご、ご ごめんなさい／＼」

「いえ 別に いいですよ 少し嬉しかったですから／＼」

「えっ？」

「なんでもないです」

「私も、嬉しかったの／＼」

「えっ？」

「なんでもないよ」

同じようなやりとりをする二人

二人は、両思いなのだが、なかなか思いを伝えることができていないのである

「それじゃあ ご飯つくりましょう 僕も、手伝います」

そして、二人でご飯をつくり、各部屋で寝たとき。今日の二人の寝顔は、どこか幸せそうな顔をしていた

第4話（前書き）

また短くなりました？ すいません m () m

第4話

小鳥のさえずりとともに、ハヤテは目覚めた

「そっかぁ 僕、追い出されたんだっけ」

昨日の事を振り返りながら身仕度を済ませる

「さっ これいじょう迷惑かけられないからな」

出て行こうとしたとたん

「ハヤテくん、どこ行くの？」

ヒナギクがいたのだ

「い、いつからそこに？」

「ハヤテくんの今日の第一声の時よ」

「（最初からいたんだ…）」

「で、どこ行くの？」

「いや これいじょう迷惑かけられないので、出て行こうと」

「迷惑なんてかかってない！」

突然怒鳴り出す

「でも…」

「でもない！ ハヤテくんはいつもそうじゃない、たまには甘えてもいいんじゃない？」

「じゃあ、お言葉に甘えてもいいですか？」

「ええ もちろん！」

ハヤテのこのセリフに満面の笑みを浮かべる

「早くご飯食べましょ」

「はい！」

第5話

ところで、三千院家では：

「なあ　マリア」

「なんです　ナギ」

「ちょっと言い過ぎたかな？」

なんだかんだいって心配していた

「そうですね：少し言い過ぎですね」

「そうか　やっぱり言い過ぎたのだな」

「（ハヤテ：お前はどうしてるのだ）」

く戻って桂家く

「いやあ　お母様の料理はおいしいですね」

幸せそうにご飯を食べていた

「ありがとう　綾崎君♪」

「ところでハヤテくん」

「なんですか？」

「学校はどうするの？」

「制服も執事服もないですからね…休みましょう」

「ヒナちゃんの制服着ていったら？」

笑顔で制服片手にじりじりハヤテによっていくヒナママ

「ちょっと お母さん！／＼／」

必死に止めようとするが…

「ヒナちゃんも、見てみたいでしょ？ 綾崎くんが着ているところ」

一瞬間が空いたのは気のせいか、すでにヒナギクの決断は決まっていた

「ハヤテくん…着てみない？」

ヒナママに負けてしまっていた

「ちょっと 二人とも落ち着いて下さいよ」

必死に説得するも、二人は止まる気なし

「（さらば、僕の人生…）」

「「わあ／＼　すごい／＼」」

「そんな目で、みないで下さい／＼」

「綾崎くん、あなた実は女の子だった？」

「はい…じゃなくて　僕は男です!!」

思わず、「はい」と、答えそうになっていた

「はっ　私としたことが…／＼」

ようやく我に帰ったヒナギク

「とにかく、　学校いこっ／＼」

（学校）

「すごいですね 生徒会室に制服用意されてるなんて」

「ええ まあ いろいろとあるのよ」

「へえ」

どうでもいいように、受け流す

「それにしても…制服似合うわね／＼」

「そうですか／＼」

少し照れたハヤテだった

「「おはよう ハヤ太くん」」

この声の持ち主たちは… 次回につづく

第6話

「「おはよう ハヤ太くん」」

「生徒会のお三方!!」

「ハヤ太くん、その言い方やめてくれないか？」

「私は、花菱美希っていうちゃんとあるんだぞ」

「そうだよ ハヤ太くん 私は、瀬川泉っていうんだよ！」

「私もだよ ハヤ太くん 朝風理沙という」

「（僕にも…ハヤ太 じゃなくて綾崎ハヤテなんですけどね…）」

あえて口には出さず心の中で言っておくハヤテだった

「私の事、忘れてない？」

「それにしても…ハヤ太くん なぜ執事服着てないんだ？」

「（それにしてもって何よ無視しないでよ…）」
今にも泣きそうにだ

「それはね 少し 「これはですね、ヒナギクさんがかしてくれたんですよ」

ヒナギクが説明しようとしたが、ハヤテの言葉にかき消された

「（ハヤテくんまで…）」

「ところで、そのヒナはどこだ？」

「あれ？ さっきまでそこにいたのに」

「ハヤ太くん」

「何ですか 瀬川さん」

「あそこ…」

その指の先をみてもと…

「ぶつぶつ…」

ヒナギクがいた 一人でぶつぶつ言っていた

「」「」「」

ようやく、ヒナギクの存在に気づいたが、すでに遅かった

「（とりあえず ハヤ太くん 謝ってこい！）」

「（なんで僕なんですか？）」

「（いいから 早くいけ！）」

「（はあ…）」

しぶしぶヒナギクに近づいていくハヤテだが

ツルン

ドン！！

なにもないところで転けてしまったハヤテだった

「(なんだこの柔らかいものは)」

／／／／

ようやく気づいたようだ

「ご、ごめんなさい／／／」

「わ、私こそ／／／」

そう、ヒナギクとキスをしてしまったのだ

第7話

ヒナギクは、今までのけ者にされていたことを忘れるぐらい目立っていた

「ハヤ太くんのバカ」

泣きながら生徒会室を出て行ってしまった瀬川

この人も、ハヤテのことが好きなのである

「よくも、私のヒナを!!」

「ハヤ太くんもやるねえ」

朝風理沙だけは、のんきにちょっかいを出していた

そして、花菱、朝風は生徒会室を出て行き、残りはハヤテとヒナギクだけとなってしまった

「……／／／」

二人はまだ顔を真っ赤にしていた

「あのお／／／」

最初に話を切り出したのはハヤテだった

「な、なに／＼」

「ごめんなさい！　じゃ」

「まって！」

これだけ言うと、ヒナギクの言葉にを聞かずハヤテはそそくさ出て行ってしまった

「（別に謝らなくてもよかったんだけどな…／＼）」

密かに喜んでいたヒナギクだった

「ああ！！　僕はなんてことを！！　ヒナギクさんにまた怒らせちゃった」

こっちはこっちで勘違いををしていた

そして、泣いて出て行った瀬川は

「ハヤテくんのバカ」

まだ泣いていた　ハヤ太からハヤテに変わっていたが

そのとき、何故か瀬川の後ろを走っていたハヤテはまた…

ツルン

「ヤバイ　まただ　ぶつかる！！」

「ふえ？」

ドゥン

第8話

「（なんだこの柔らかい物は…まさか）」

さっきのこともあり気づくのに時間はかからなかった

「す、すいません／＼」

「別にいいよ／＼」

この人も、泣いていることを忘れるぐらい目立っていた。しかも、生徒達がいるまえで

「瀬川さん　こっち／＼／」

「はあ…はあ　大丈夫ですか？」

「うん　なんとかね」

「そ、それより　さっきはごめんなさい！！」

「だから　いいって　それに…嬉しかったから／＼」

「えっ？」

その瞬間、ハヤテは思った

「（この展開はきちょうのか？）」

「ハヤテくん！」

「は、はい」

「ヒナちゃんとキスしたときどうおもった？」

「どうって 言われても困ります…」

「じゃあ 私としたときは？」

「それも…」

あやふやな答え方をするハヤテだが

「でも よかったです」

これだけ言うとそそくさいってしまった

／／／

どういう意味でいったのかわからないのに照れてしまった瀬川だった

第9話

瀬川と離れた後、ハヤテは…

「ああ!! どうすればいいんだ!! ヒナギクさんにも、顔を合
わせることもできないし、どうすれば…」

路頭に迷っていた

そのころヒナギクは…

「ハヤテくん どこ行ったのよ!」

キスをしたことを氣にとめてもいなかった
もどってハヤテは…

「よしっ! 公園で野宿だ」

いつも、この方法しかでてこないのである

「手持ちの お金は12円かあ」

毎度のことです

振り出しにもどったハヤテ

「ハヤテくん みいゝつけた」

その声の方に顔を向けると

「瀬川さん！ どうしたんですか？」

「いやあゝ あの後ハヤテくん どっかいつちやったから探してたんだ」

「すみません」

「それよりこんなことで何してるの？」

「それは…」

屋敷から追い出されことや、ヒナギクの家に泊まったことなど、すべて話した

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4907/>

ハヤテのごとく！

2011年10月7日05時23分発行